

地域における障害者施設見学ツアーの意義

～地域ネットワーク構築の要として～

特定非営利活動法人 障害者支援情報センター
進 藤 義 夫

<要 旨>

世田谷区で実施されていた「作業所見学ツアー」は委託終了後も問い合わせが多く、継続が期待されている。当研究を利用して10回「障害者施設見学ツアー」を実施し、当事者28名・家族13名・関係者19名の計60名が参加した。本論文では実際の障害者施設見学ツアーの様子についていくつかの施設の写真をもとに具体的に報告する。また同時に障害者施設見学ツアー利用者に対して実施したアンケートの結果から、「いろいろな施設の違いを実際に知ることができた」「地域の社会資源について知ることができて安心した」「制度やシステムについても学べた」「他の参加者が質問をしてくれて理解が進んだ」などの意見を得た。

これらの結果をもとに地域ネットワークの要となっていた「障害者施設見学ツアー」の再開および継続の方向性を探る。

<キーワード>

・障害者施設見学ツアー ・世田谷区 ・地域ネットワーク ・障害者自立支援法 ・就労移行支援事業所 ・就労継続支援事業所 ・地域活動支援センター ・共同作業所

【はじめに】

1996年(平成8年度)から世田谷区において開催されていた「作業所見学ツアー」は、区内約20ヶ所の個性豊かな精神障害者共同作業所を5つのコースに分け一日で4-5ヶ所見学できるツアーであった。精神保健福祉関係者や企業、学生、医療関係者などだれでも利用が可能であったが、とりわけ精神障害当事者が作業所を探すことを一番の目的として、平成16年度～20年度は世田谷区の委託事業となっていた。しかし現在は、障害者自立支援法が三障害合同施策であるにもかかわらず精神障害者のみ対象であることなどの理由から世田谷区の委託が終了したために、事業存続が困難となっている。

しかし、このような障害者施設見学ツアーの存続を望む声も多く、当事者・家族からの問い合わせも多い。実際にライオンズクラブ等の企

業団体等に呼び掛けてライオンズクラブメンバーと障害当事者がともに乗る形式でのツアーの開催など実施協力をお願いもしている。今回は、主に家族会等に呼びかけつつ、障害者施設見学ツアーを実施して、利用者から見た意義を解析し、事業継続のための材料としたい。

【障害者施設の選定と実施概要】

障害者支援見学ツアーを、以下の10回の行程で実施した(表1)。施設の選定はあらかじめ施設に都合のよい日程をアンケートにて調査し、場所が相互に近いなどの地理的条件にくわえ、どのコースにおいても「就労移行支援事業所(利用期限2年で一般就労を目指す)」「就労継続支援B型事業所(最低工賃は出ないが施設で工賃を稼ぐ)」「地域活動支援センター(居場所的色彩が強い)」「共同作業所(まだ障害者

表1：実施した障害者施設見学ツアーの日程及び施設群

回数	日時	施設1	施設2	施設3	施設4	参加者
①	11月24日	パイ焼き窯	パイ焼き茶房	T&E企画	さくら会	5名
②	12月1日	藍工房	Navio けやき	Crazy Cats	ウツパッカーの森	3名
③	12月15日	さらぼれ塾	喫茶室パイン	陽だまりの庭	すとおりの	7名
④	1月12日	T&E企画	ざしきわらし	ちぐさ企画	ハーモニー	5名
⑤	2月9日	ウトパーク	喫茶室パイン	まごのて便	千草工芸	5名
⑥	2月16日	にゃんこの館	さらぼれ塾	ざしきわらし	風の谷プロジェクト	7名
⑦	3月9日	パイ焼き茶房	パイ焼き窯	りばてい	藍 Cafe&Gallery	7名
⑧	4月27日	T&E企画	パイ焼き窯	りばてい	まごのて便	7名
⑨	5月11日	藍工房	喫茶室パイン	さらぼれ塾	風の谷プロジェクト	7名
⑩	5月21日	ウトパークの森	Navio けやき	ざしきわらし	ハーモニー	7名

自立支援法に移行していない)」などの施設類型がバランスよく分布して見学できること、昼食をとれる施設があることなどを配慮して決定した。

集合は近隣の駅の改札口にて行い、原則として当法人の所有するワゴン車にて見学ツアーを実施した。利用定員は6名としたが、利用希望者がつねに多いため、途中から7名とした。また、広報については、区内各精神障害者施設、区内5か所の総合支所(健康づくり課、生活支援課、保健福祉課)、松沢病院・烏山病院等の区内病院精神科、家族会会報等にて行った。参加者にはツアー当日、アンケートを実施し、各施設の感想、施設見学ツアー全体の感想のほか、ツアーの意義として考えられることについて自由記述にて回答してもらった。



図1：主に利用したワゴン車

【障害者施設見学ツアーの実施】

参加者の了解をとり、記録写真を撮影した。施設ごとに、ゴルフボール詰めやささまざまな封入等の所内授産(内職)場面、焼き菓子や藍染め・絵葉書、変わったところでは幻聴妄想カルタに代表される自主製品、喫茶店など作業種目や特徴がよくわかるように、各施設職員もしくは利用者の説明を聞きながら質疑応答の時間をとった。各施設における見学時間は30分～60分程度であった。昼食を提供している施設では、ツアー利用者のために利用者と同じメニューの昼食を提供していただいたりもした。また、当日見学ツアーの中で一部時間を取り、精神障害者支援の歴史や区内ネットワークについて、障害者自立支援法や区内のネットワークシステムについての説明も行った。

参加者は全参加者60名のうち、当事者が28名、家族が13名、関係者が19名であった。家族会会報を見て利用された方の中には、豊島区や品川区・杉並区などの区外の方3名、また千葉県家族会グループ5名という都外参加者もあった。広報を始めて時間がたつにつれ問合せ・待機者が増えた。当事者は体調によって前日にキャンセルすることもあったが、待機者の中から次の参加者があらわれた。

【施設の実際】

実際に見学し他施設のうち、ツアーの実際の雰囲気わかるよう、いくつかの施設についてここでは報告する。

① 就労移行支援事業所

就労移行支援事業所は施設利用者に対して2年以内で一般就労を目指す訓練を行う施設である。パソコン教室が中心の「さら就労塾@ぼれぼれ」、下請け作業主体の「T&E企画」が該当する。



図2：さら就労塾@ぼれぼれでのパソコン風景

「さら就労塾@ぼれぼれ」（千歳船橋）ではワード・エクセル以外にもデータベースソフト・WEBソフトなどの習得や資格取得のできるコースがあること、企業マナーや体力づくりのプログラムもあるとの説明であった。



図3：T&E企画での説明風景

「T&E企画」（用賀）では下請け作業ではあるものの、作成するものがサンプルではなく、

最終商品となる丁寧な作業も請け負っているとの説明で、比較的年齢層の若い利用者たちが多かった。企業からの信用を得るために短い納期の作業もできるだけ受注し、企業からの期待に応えることでさらに作業量を確保することができるとの説明であった。また、施設利用希望者の就労働機を下げないために「働きたい」との意志があれば週1回からでの利用や区外からの利用も可能であるとの説明に、ツアー利用者たちからの関心が高かった。

② 就労継続支援事業所

就労継続支援事業所は所内での作業を通じて高い工賃を提供する施設である。ここでは下請け作業を中心に行っている「にゃんこの館」「千草工芸」等、自主生産品作成を中心に活動している「藍工房」、喫茶店活動を行っている「喫茶室パイン」「パイ焼き茶房」「ざしきわらし」等が該当する。

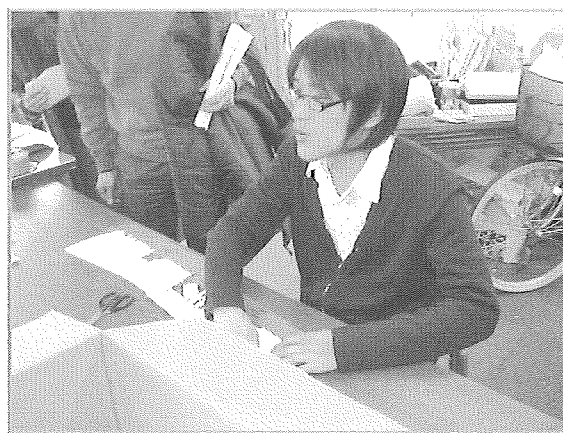


図4：にゃんこの館で作業内容を説明する職員

「にゃんこの館」（千歳船橋）では、お菓子のPOP付けという下請け作業について職員が説明した。作業に追われながらも、傍らのスペースでは当日行われる料理会のための準備が行われていたり、専門家による月1回の訪問ボランティアマッサーがたまたまツアー実施日に行われていたりして、就労継続支援事業所における、単なる下請け作業だけでない幅広い日中活動が垣間見えた。



図5：千草工芸での細かな作業風景

「千草工芸」（芦花公園）では、企業から貸し出された工具を使って、ときにはピンセットなども使う細かな作業が行われていた。「千草工芸」では所内作業だけでなく、近所のすし屋の清掃作業などの外勤訓練も取り入れていた。

「千草工芸」は「就労移行支援事業所部門」「就労継続支援事業所部門」と両方を持つ多機能型事業所で、「就労移行支援事業所部門」ではパソコン教室も行われていた。



図6：藍工房における自主製品（藍染め）

「藍工房」（若林）では藍染め・組みひも・刺し子・機織りなどの伝統工芸を自主製品として製作していた。対象者が精神障害者だけでなく知的障害者もふくまれている、別室では機織りが行われ、利用者が詳しく自分の制作した製品について説明をしてくれた。ツアー参加者は製品のグレードの高さに驚いていた。



図7：松沢病院の中にある喫茶室パイン

「喫茶室パイン」（八幡山）は都立松沢病院の中にある喫茶店で施設利用者はウェ이터・調理業務をこなしていた。また、施設利用者がご自分の作業・日常生活・将来の希望などについて実際に話をしてくれて、見学ツアーに参加した施設利用希望者に対してアドバイスを行ってくれた。



図8：パイ焼き茶房での喫茶風景

「パイ焼き茶房」（尾山台）は尾山台の商店街のなかほどにある喫茶店である。一見して障害者施設とはわからないおしゃれな店構えで、ツアーに参加した施設利用希望者からの質問も多かった施設利用希望者。同じ社会福祉法人の運営する「パイ焼き窯（就労移行支援・就労支援継続の多機能型施設）」から仕入れた手作りケーキを販売している。厳選された材料で作られる高品質の手作りケーキを頂いた。



図9：ざしきわらしの店内風景

「ざしきわらし」（祖師谷大蔵）では、「カフェメロディ」という喫茶店名をつけて、地域の商店街と協力しながらウルトラマングッズをも販売している。壁にはウルトラマングッズの棚やウルトラマンの隠し絵などがところせましと並んでいた。反面、作業シフトが固定せず、希望に従って30分ごとに交代できたり、奥にはゆったりと休める広い休憩スペースも用意されており、障害者のペースで働ける空間となっていた。

「喫茶室パイン」「パイ焼き茶房」「ざしきわらし」の3つの喫茶店系障害者施設に共通していたのは、もともと行っていた喫茶店という作業種目だけでは障害者自立支援法における運営が困難であることである。障害者自立支援法でさだめる就労継続支援事業所の規定では、おおよそ一日の施設利用者数が20名程度必要であるが、1か所の喫茶店の中に20名の障害者が同時に働くのは不自然であり、当然時間をわけてシフトを組んで働くことになる。反面ノルマとなる工賃金額もある程度決められており、その工賃金額を確保するためには喫茶店という作業種目だけでは足りなくなってしまう、結局それぞれの施設が別室を借りており、下請け作業も作業種目として取り入れざるを得なかったという現状を説明した。見学ツアー参加者は喫茶店系施設におけるこれらの説明を聞いて、障害者自立支援法の方向性や地域における影響を感じることができた。

③地域活動支援センター

地域活動支援センターは、搜索活動など居場所的色彩の強い事業所である。世田谷区では「りばてい」が地域活動支援センターに移行している。



図10：りばていの工夫された作業スペース

「りばてい」（奥沢）では午前中は主に作業、午後は書道やゲームなどの様々なプログラムが用意されており、地域活動支援センターといってもかなり作業を行うところである。自閉症の傾向が強く、他の利用者とともに作業を行うことが難しい方が作業できるように、その1名のために工夫した作業スペースや、休憩用の2段ベッド、規定に従ってあらたに設置した相談室コーナーなどを見学できた。

地域活動支援センターは、運営費の面で苦労しており、それまで毎日実施していた料理会の日数を減らしたり、職員配置をぎりぎりまで工夫するなどして対応していた。

④共同作業所

世田谷区内には、障害者自立支援法上の「就労移行支援事業所」「就労継続支援事業所」「地域活動支援センター」に移行する前の「共同作業所」もまだ複数残っており、「まごの手便」「Crazy Cats」「ハーモニー」などがこれに該当する。それぞれが自立支援法への移行を念頭に置きながら説明をしてくれた。



図 1 1 : まごの手便でテルミーを体験

「まごの手便」(下高井戸)は、絵葉書作成などを中心の作業とした共同作業所で、将来的には就労継続支援事業所を目指している。本来は体のセルフケアがこころのセルフケアにもつながるとの考えからをテルミーという温灸体験を施設利用者に対して行っている。今回は見学ツアー参加者に対してもテルミーの体験をして頂いた。



図 1 2 : Crazy Cats のステージ

「Crazy Cats」(梅丘)では、ライブイベントを中心の活動を行っており、今後の障害者自立支援法の枠組みでは、営業ライブを行うことで工賃を稼ぎ、また、下請け作業も一部取り入れることで就労継続支援事業所を目指していくという方向性が定まっている。見学ツアーでは、ビデオによるライブの様子を見せていただいたりした。



図 1 3 : ハーモニーの幻聴妄想カルタ



図 1 4 : 幻聴妄想Tシャツについても説明中

「ハーモニー」(上町)は地域活動支援センターを目指している共同作業所で、施設利用者のペースに合わせてリサイクルショップを運営しており、毎日昼食を提供している。ここでは、最近開発した「幻聴妄想カルタ」という自主製品の説明を受けた。

「幻聴妄想カルタ」は施設を利用する精神障害者が、他ではなかなか話せない自らの妄想体験などを所内心理グループで取り上げ、それぞれの妄想をカルタの文言にして絵を描き、自主製品として販売を始めたものである。このユニークさが取材対象にもなりテレビでも取り上げられるようになってきている。職員は施設利用者の世界がさらに表現できないかと、開発中の「幻聴妄想Tシャツ」についても現物をもとに説明をしてくれた。

共同作業所はこのように、自由な発想で活動を行っており、その活動のユニークさに見学ツ

ア参加者は驚いていた。また、ユニークな共同作業所が障害者自立支援法の枠組みに入るために「工賃の確保」「運営費の確保」などの条件を達成するために苦勞しているとの説明を受け、地域の現状についての理解も深まったようであった。

【参加者に対するアンケートと感想】

参加者に対しては簡単なアンケートを行った（60名中回収55名）。各施設の感想とともに、見学ツアー全体に関する感想、及び意義と思えるものについて書いてもらった。

感想としては、当事者（28名）は具体的な施設の感想以外の記述は少なかったが、全体的感想としては、「いろいろな施設を見学できてよかった（5名）」「自分の行きたい施設が見つかってよかった（4名）」、「また施設を探したい（3名）」等の記述がみられた。家族（13名）は「それぞれの施設が違う方針で運営されているのが理解できた（6名）」「子供はまだ引きこもっているが地域に社会資源があることがわかって安心した（4名）」等の意見が多く、関係者（19名）は「他の施設を見るのが初めてで刺激になった（4名）」「制度やシステムについても説明があり、勉強になった（4名）」と自分の施設以外の見学機会がなかなか得られていなかったことをうかがい知ることができた。全体としては「自分ひとりで回るのはできなかつたような質問を他の人がしてくれてわかることが多かった（8名）」等の感想が多くみられ、「このようなツアーを今後も継続してほしい」との希望が家族関係者のほぼ全員にみられた。

【考察】

見学ツアーの継続については参加者からの希望だけでなく、本研究終了後も「次回はいつか」との問い合わせが多い。その後、参加した当事者から実際に施設利用に至ったとの報告が直接ツアー実施担当者に連絡が来て（3名）、

1名は区内の施設に、1名は区外の施設で当日ご紹介したところに決まったとの報告を受けた。このように、作業所探しとしての意義は大きいと考えられる。また、「他の参加者の質問が聞くことができる」との意義を示した参加者が多く、5-7名の少人数グループで見学する形式は有意義のようである。

また、参加者の分布から、「当事者家族が施設を探す」目的だけでなく、「家族が施設を見て社会資源を知る」ために利用されたり、区内施設職員・病院職員・訪問看護ステーション職員など「関係者の研修」として利用されることも見学ツアーの意義として大きいとわかった。

見学ツアー実施とは別に区内施設関係者に事前にとった「障害者施設見学ツアーの意義」に関する自由記述のアンケートでは、

「見学者に対して説明の仕方を工夫している」「連絡会に参加しない施設とも連携が取れる」「地域全体で見学者が来て当然、という雰囲気醸成された」

という地域ネットワークの形成に大きく寄与していることがうかがわれた。さらには、

「企業が見学ツアーに乗った時、自主製品を見てすぐに商談に発展した」

「退院促進で病院関係者が実際に施設を見学できる」

「学生の実習で法律で定められていない地域の現場を見せることができる」

「一般の区民に対しても啓発の意味が大きい」など、就労支援や退院促進、啓発の意義も大きいという回答を得ている。

今後は、従前の「当事者が作業所を探す」目的だけでなく、「啓発」「研修」の意義も盛り込んだ障害者施設見学ツアーの再事業化について、行政やライオンズクラブ等の企業団体に提案していきたいと考える。